

# 海外食料需給レポート

(平成 30 年 12 月)

平成 31 年 1 月 18 日

農林水産省

# 海外食料需給レポートについて

## 1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、そのうち、主食や飼料原料となる主要穀物(米、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、安定供給に向けて世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

## 2 対象者

このレポートの対象は国民の方々の中でも、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

## 3 重点としている事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

## 4 公表頻度

月1回、月末を目処に作成、公表します

## 5 ここに記載のない情報は以下を参照願います。

### (1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し(農林水産政策研究所)：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

### (2) 農林水産関係機関の情報 (ALIC の情報サイト)：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_000168.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_000168.html)

### (3) その他海外の機関 (英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関 (FAO)：<http://www.fao.org/home/jp/>
- ・国際穀物理事会 (IGC)：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構 (OECD) (農業分野)：<http://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム (AMIS)：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省 (USDA)：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社 (CONAB)：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省 (AAFC)：<http://www.agr.gc.ca/eng/home/?id=1395690825741>
- ・豪州農業資源経済科学局 (ABARES)：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

# 目 次

## 概要編

I	2018年12月の主な動き	1
II	2018年12月の穀物等の国際価格の動向	2
II	2018/19年度の穀物需給（予測）のポイント	2
III	2018/19年度の油糧種子需給（予測）のポイント	2
V	今月の注目情報	
	中国の穀物・油糧種子の需給動向	3

## (資料)

1	穀物等の国際価格の動向	6
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	7
3	原油価格、為替、海上運賃の動向	8
4	平成30年6月以降の食品小売価格の動向	9

## 品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
2	とうもろこし	6
3	米	9
II	油糧種子	
	大豆	14

## 【利用上の注意】

## (概要編)

# I 2018年12月の主な動き

## 1 中国の収穫と貿易動向

国家統計局によれば、2018/19年度の中国の穀物・大豆の生産量については、穀物は前年度に比べて減少し、大豆は増加する見込み。在庫の多いとうもろこしや米の作付けが減少し、大豆へシフトしたことが要因。国内の大豆の消費量の減少もあり、大豆輸入は減少する見込み。

なお、ホワイトハウスのウェブサイトによれば、12月1日の米中首脳会談で中国が米国産農産物の輸入開始について合意したと発表されたが、ブラジル産大豆も例年より早く作付けされ、12月末には収穫が開始されることから、中国の大豆輸入においてブラジル産から米国産に振り替わる数量は限定的とみられる。

## 2 南米の生育動向

ブラジルでは、降雨に恵まれ、例年より早く、大豆、夏とうもろこしの作付けが多く、多くの州で終了し、順調に生育し、一部では収穫が開始された。しかしながら、12月末に大豆主産地のマトグロッソ州等で乾燥傾向となっており、作柄への影響に留意する必要がある。

2018/19年度の大豆及び主に大豆収穫後に二毛作で栽培されるととうもろこし双方の作付面積は増加する見通しである。

一方、アルゼンチンでは、12月上旬の降雨過多により大豆の作付けが遅れ、5,100万トンの生産見通しを達成するには天候の改善が必要。

## 3 豪州東部の干ばつによる小麦生産等への影響

12月の豪州農業資源経済科学局（ABARES）の報告によれば、豪州の穀物・油糧種子の生産量は東部の干ばつの影響で9月よりさらに下方修正され、収穫が終盤を迎えた小麦の生産量は豪州全体で1,700万トンと2007/08年度（1,300万トン）以来の低水準の見込み。また、現在、生育期の米については灌漑用水の不足から前年より作付面積は75%減と大幅な減産の見込み。

ただし、我が国がうどん向け小麦を輸入しているウェスタンオーストラリア（WA）州は降雨に恵まれ、小麦の生産量は900万トンを超え、豊作の見通し。

## II 2018年12月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、11月下旬は180ドル/トン台後半で推移。12月中旬にかけ、堅調な米国の輸出成約高やロシア産の輸出価格の上昇等から190ドル/トン台後半に値を上げた。その後、12月下旬にかけては、ロシア政府の輸出見通し引き上げや米国の輸出成約高が市場予想を下回ったことから値を下げ、12月下旬現在、180ドル/トン台半ばで推移。

とうもろこしは、11月下旬は、140ドル/トン台半ばで推移。その後、好調な輸出やブラジルの乾燥懸念から12月中旬に150ドル/トン台前半に値を上げたものの、ブラジルの天候改善や大豆価格の低下等により、12月下旬現在、140ドル/トン台後半で推移。

米は、11月下旬は、420ドル/トン台前半で推移。その後、中国やフィリピンの需要やバーツ高から、12月下旬現在、420ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、11月下旬は320ドル/トン台後半で推移。米中首脳会談での関税引上げ保留の合意や中国国営企業の米国産買付け報道等から12月中旬に330ドル/トン台後半に値を上げたものの、12月下旬にかけて、中国向け輸出成約高が市場の期待を下回ったこと等から一時310ドル/トン台後半まで値を下げた。その後、1月上旬の米中通商交渉での米国産大豆の輸入量増加への期待から、12月下旬現在、320ドル/トン台前半で推移。  
(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場、米はタイ国家貿易員会価格

## III 2018/19年度の穀物需給(予測)のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から上方修正され 26.0億トンとなるものの、消費量の26.4億トンを下回る見込み。

また、前月と比べ、期末在庫率は 上方修正され 29.0%となった(資料2参照)。  
(注: 数値は米国農務省需給報告による)

生産量は、前年度と比較して、とうもろこしが増加するものの、小麦、米が減少するため、前年度をわずかに下回り 26.0億トンの見込み。

消費量は、小麦、とうもろこし、米とも前年度を上回り、世界全体では前年度を上回る 26.4億トンの見込み。

貿易量は、小麦は減少も、とうもろこし、米が増加し、4.3億トンと前年度を上回る見込み。

期末在庫量は、7.7億トンと前年度に比べ減少し、期末在庫率も 29.0%と前年度(31.2%)に比べ低下する見込み。

## IV 2018/19年度の油糧種子需給(予測)のポイント

油糧種子全体の 生産量は、前月よりわずかに上方修正され 6.00億トンとなり、消費量は下方修正され 5.84億トンとなったため、生産量が消費量を上回る見込みは変わらず。

一方、期末在庫の積増しにより、期末在庫率は前年度より上昇し 22.1%となる見込み。

(注: 数値は米国農務省需給報告による)

## V 今月の注目情報：中国の穀物・油糧種子の需給動向

2018年も世界の穀物・油糧種子需給は中国の動向に影響された。米中通商摩擦に関連し、7月から米国産大豆、とうもろこしへの追加課税と代替のブラジル産大豆の大量輸入、タンパク原料輸入の抑制のための配合飼料設計の見直しに加え、秋には2007年まで遡及した統計局の生産統計の見直しなど。主な状況についてまとめた。

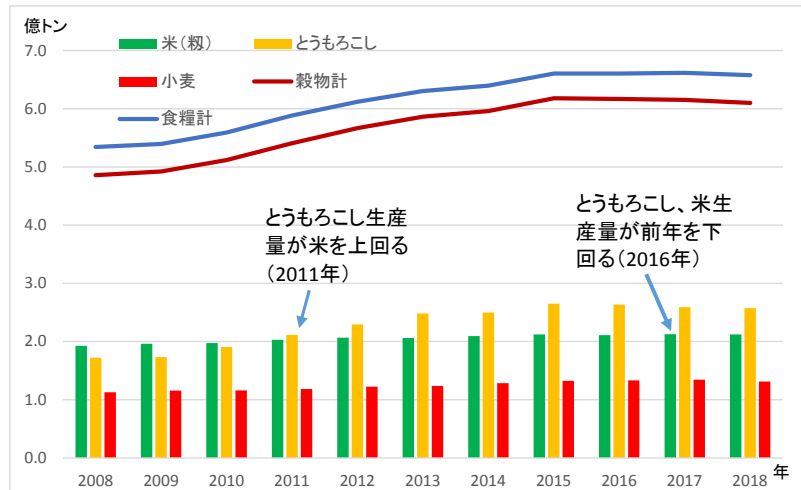
### 1 2018/19年度の生産動向

中国国家统计局の12月公表の食糧（穀物、大豆を含む豆類、芋類）

生産見通しによれば、2018/19年度の中国の食糧生産は、6億5,789万トンとなった。前年度より米、小麦、とうもろこしといった穀物生産が減少し、大豆等など豆類生産が増加する見通し。

在庫量の大きいとうもろこしや米の在庫を調整するため、とうもろこしや米の作付面積を減少させ、大豆にシフトしたことが要因とされている。

図1 中国の食糧及び穀物（内数）の生産量の推移



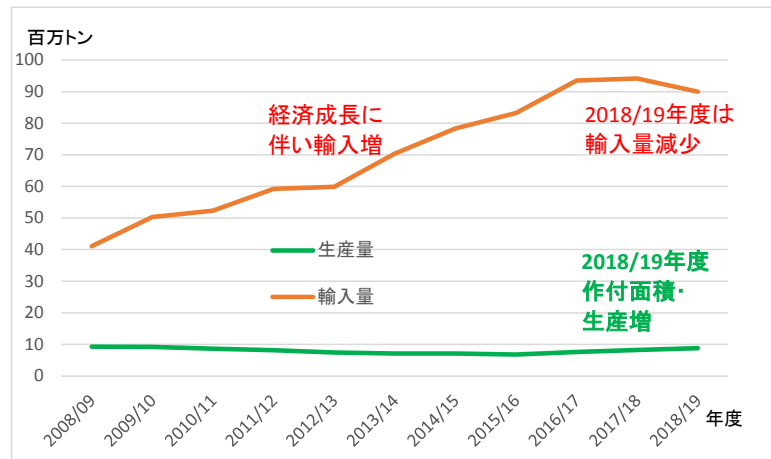
資料：中国国家统计局資料をもとに農林水産省にて作成

### 2 穀物・油糧種子の貿易動向

#### (1) 大豆

最近の中国の経済成長に伴う食生活の改善や西洋化に伴い、大豆需要は伸び続け、2017/18年度は年間1億トンに届く水準まで増加した。生産量は1,400万トンから1,500万トン程度で大きな変化はないため、需要の9割近くをブラジル及び米国からの輸入に依存する構造となっている。

図2 中国の大豆生産・輸入量の推移



資料：USDA PS&D (2018.12)をもとに農林水産省にて作成

しかしながら7月以降、中国は米国との通商摩擦の一環で、米国産大豆に25%の追加関税を賦課し、大豆輸入を米国産からブラジル産に振り替えた。その結果、米国産大豆の価格は下落し、6月までブッシェル当たり10ドル台であったシカゴ相場が、一時は8ドル台まで下落した。また、大豆など蛋白原料の過度な海外依存を避けるために、10月末には中国飼料協会が飼料規格について蛋白原料の使用量の見直しを行った。

その後、12月1日にはG20の場で中国習近平国家主席が米国トランプ大統領と会談し、大豆を始めとする米国産農産物の輸入再開への合意について公表されている。しかしながら、ブラ

ジル産について一部で乾燥の影響はあるものの、作付け・生育が例年になく早く進捗し、一部収穫が12月末にも開始され、新穀の輸出が1月から可能なこと等から、米国産の大豆輸入量の増加については限定的とみられている。

## (2) 穀物

とうもろこしについては、2016/17年度まで在庫が大幅に積み上がったことから輸入量は減少したものの、2017/18年度以降、在庫の減少に伴い、一定の在庫水準を維持するため再び輸入が増加に転じたとみられる。また、小麦については中国国内で代替できない、高品質小麦を中心に輸入が行われている。一方、米の輸入については一時増加傾向にあったが、最近の国内在庫の積み上がりから輸入が減少し、逆にアフリカ向け等への輸出が増加している。

## 3 国家統計局データの2007年からの遡及見直しと期末在庫の状況

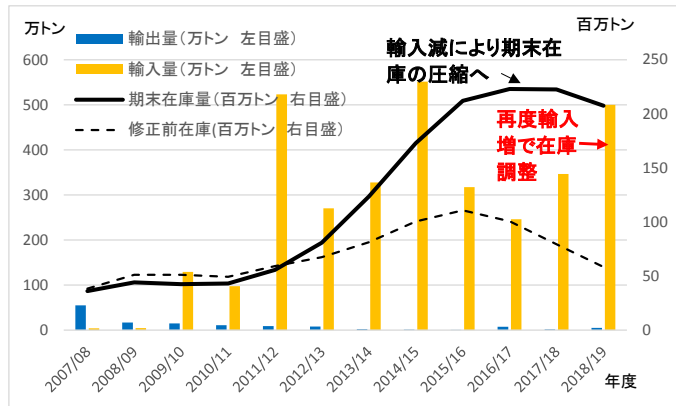
2018年10月に国家統計局は、第3次農業センサスの結果等も反映し、2007年に遡及して、穀物や大豆の生産量を見直した。

USDAは、11月の需給報告にて、国家統計局の2007年まで遡及した生産量データの見直しに合わせ、中国の米、小麦、とうもろこし等の生産量を見直した。中国は在庫量については公表していないため、USDAは生産量の見直しを基に消費量、期末在庫量等の見通しを修正した。

特に、とうもろこしについては中国で生産量が大幅に上方修正されたため、世界の期末在庫量や在庫率も大幅に増加、上昇している。

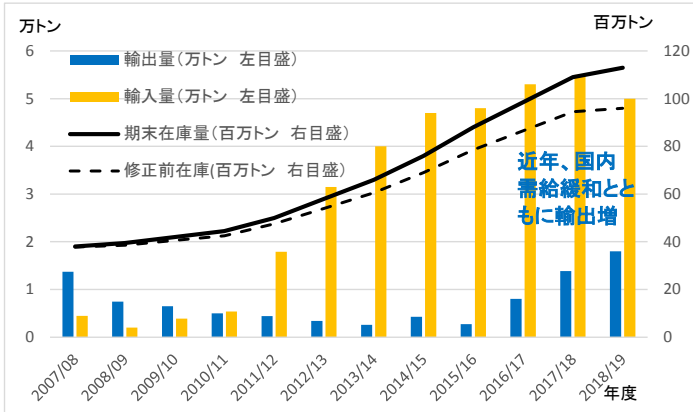
その結果、中国の穀物の在庫量は、世界の穀物の在庫量のうちその約2/3を占めることとなったが、これは、国際市場での価格競争力が乏しく、国内市場向けという点に留意する必要がある。

図3 中国のとうもろこしの在庫と輸出入量の推移



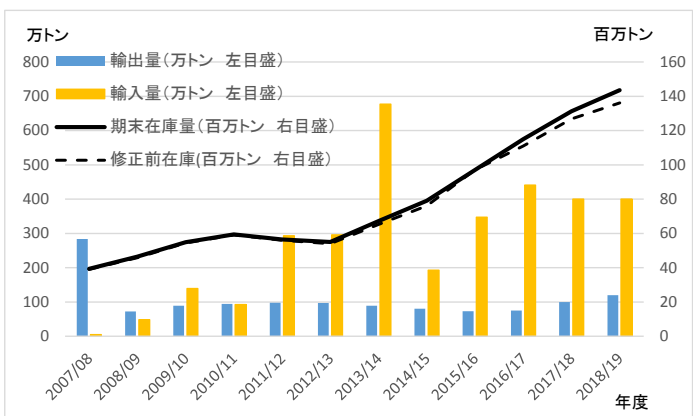
資料：USDA PS&D(2018.12)をもとに農林水産省にて作成

図4 中国の米の期末在庫量と輸出入量の推移



資料：USDA PS&D(2018.12)をもとに農林水産省にて作成

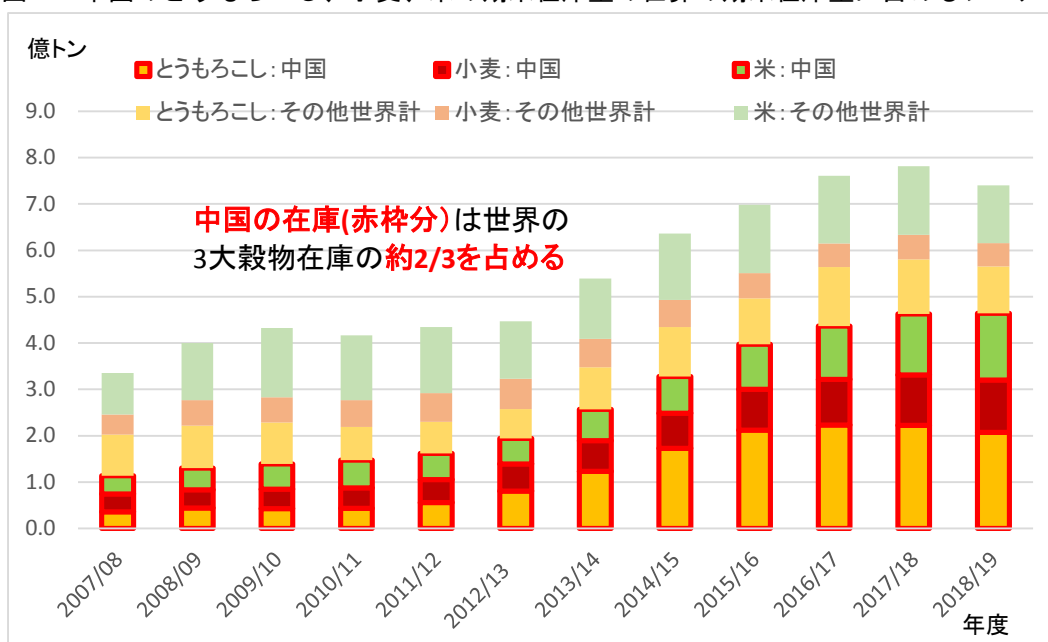
図5 中国の小麦の期末在庫量と輸出入量の推移



資料：USDA PS&D(2018.12)をもとに農林水産省にて作成



図6 中国のとうもろこし、小麦、米の期末在庫量の世界の期末在庫量に占めるシェア



資料：USDA PS&D(2018.12)をもとに農林水産省にて作成、注：米は精米ベース

(参考) 表：中国のとうもろこし、米、小麦の生産量及び期末在庫量のデータ修正の比較 (太字が修正後)

(単位:百万トン)												
年度	生産量(国家統計局)の修正の比較											
	とうもろこし			米(籾ベース)			小麦			小計		
	前	後	差	前	後	差	前	後	差	前	後	差
2007/08	152	155	3	186	<b>186</b>	0	109	110	0	448	<b>451</b>	3
2008/09	166	172	6	192	<b>193</b>	1	112	113	0	470	<b>478</b>	7
2009/10	164	173	9	195	<b>196</b>	1	115	116	1	474	<b>485</b>	11
2010/11	177	191	14	196	<b>197</b>	2	115	116	1	488	<b>504</b>	16
2011/12	193	211	19	201	<b>203</b>	2	117	119	1	511	<b>533</b>	22
2012/13	206	230	24	204	<b>207</b>	2	121	123	2	531	<b>559</b>	28
2013/14	218	248	30	204	<b>206</b>	3	122	124	2	544	<b>578</b>	34
2014/15	216	250	34	207	<b>210</b>	3	126	128	2	548	<b>588</b>	39
2015/16	225	265	40	208	<b>212</b>	4	130	133	2	563	<b>610</b>	47
2016/17	220	264	44	207	<b>211</b>	4	129	133	4	555	<b>608</b>	53
2017/18	216	259	43	209	<b>213</b>	4	130	134	5	554	<b>606</b>	52
2018/19	225	<b>257</b>	32	201	<b>212</b>	11	128	<b>131</b>	3	554	<b>601</b>	47

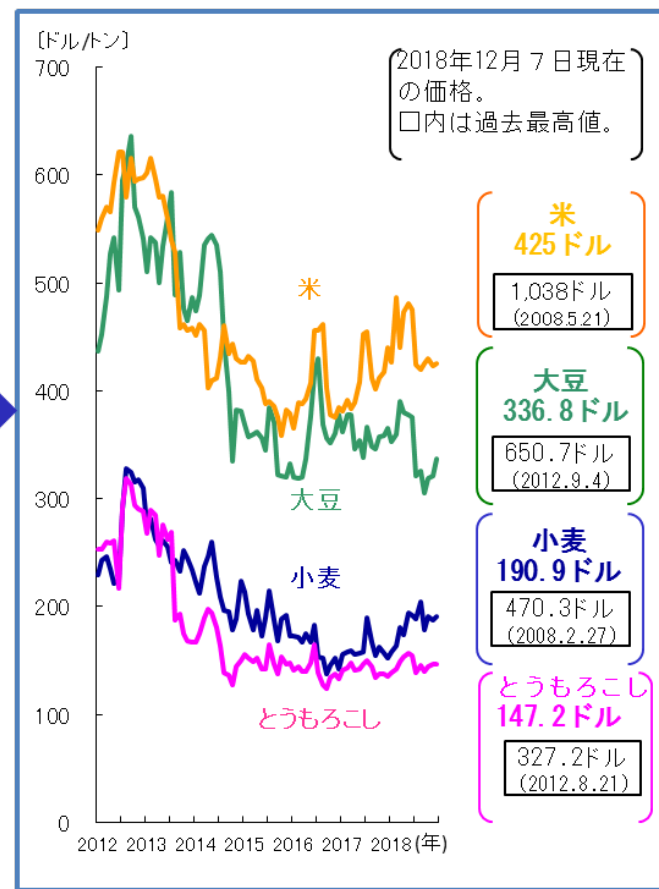
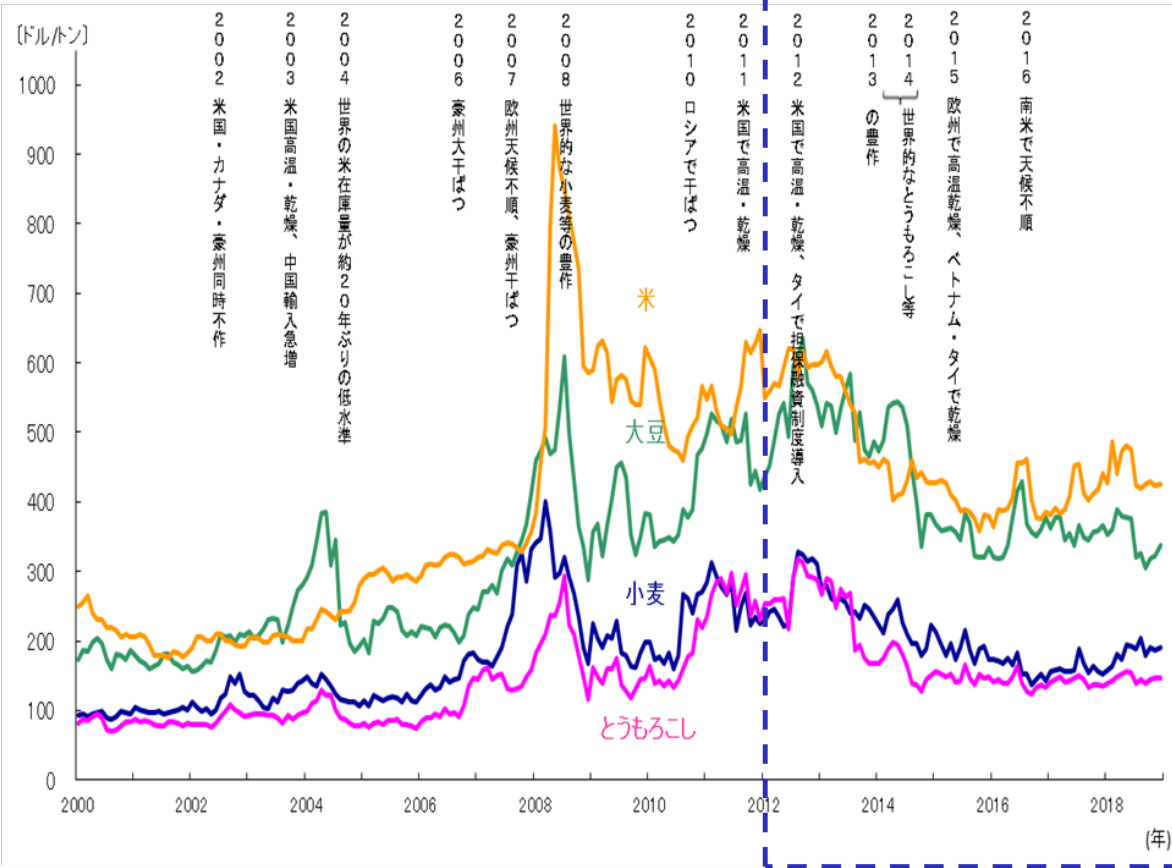
注：2018/19年度の生産量は黒字がUSDA、赤字は国家統計局最新データ(12月)

(単位:百万トン)												
年度	期末在庫量(USDA 修正前(10月見通し)、修正後(12月見通し))の比較											
	とうもろこし			米(精米ベース)			小麦			小計		
	前	後	差	前	後	差	前	後	差	前	後	差
2007/08	38	<b>36</b>	△ 2	38	<b>38</b>	0	39	<b>39</b>	0	115	<b>114</b>	△ 2
2008/09	51	<b>44</b>	△ 7	39	<b>40</b>	1	46	<b>46</b>	1	136	<b>130</b>	△ 5
2009/10	51	<b>43</b>	△ 9	41	<b>42</b>	1	54	<b>55</b>	0	146	<b>139</b>	△ 7
2010/11	49	<b>43</b>	△ 6	43	<b>45</b>	2	59	<b>59</b>	0	151	<b>147</b>	△ 4
2011/12	59	<b>56</b>	△ 4	48	<b>50</b>	3	56	<b>57</b>	1	163	<b>162</b>	△ 1
2012/13	68	<b>81</b>	13	54	<b>58</b>	4	54	<b>55</b>	1	176	<b>194</b>	18
2013/14	81	<b>124</b>	42	61	<b>66</b>	6	65	<b>67</b>	2	207	<b>257</b>	50
2014/15	100	<b>173</b>	72	69	<b>76</b>	7	76	<b>79</b>	3	246	<b>328</b>	82
2015/16	111	<b>212</b>	101	79	<b>88</b>	10	97	<b>97</b>	△ 0	286	<b>397</b>	111
2016/17	101	<b>223</b>	122	87	<b>99</b>	12	111	<b>115</b>	4	298	<b>436</b>	138
2017/18	80	<b>223</b>	143	95	<b>109</b>	15	127	<b>131</b>	4	301	<b>463</b>	162
2018/19	59	<b>207</b>	149	96	<b>113</b>	17	136	<b>144</b>	7	291	<b>464</b>	173

# 資料1 穀物等の国際価格の動向(ドル/トン)

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な小麦やとうもろこしの豊作、大豆の南米での増産や米国での豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降横ばいで推移。米はタイの在庫放出等から低下したが、2017年以降上昇傾向。
- なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により2008年以前を上回る水準で推移している。

## □ 穀物等の国際価格の動向



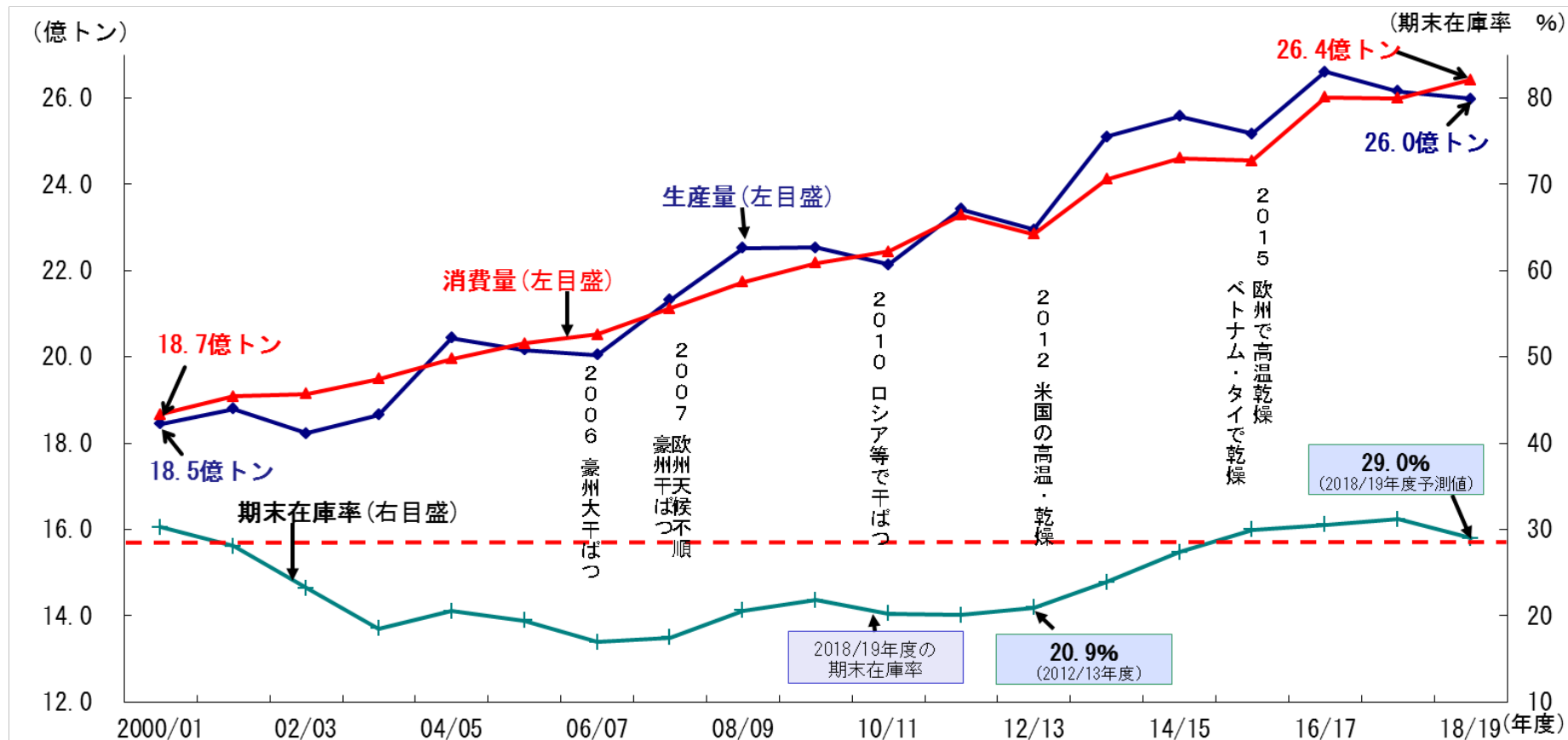
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。米は、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のF.O.B価格である。

注2：過去最高価格については、米はタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、米以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

## 資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2018/19年度は、2000/01年度に比べ1.4倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2018/19年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り29.0%となるものの、直近の価格高騰年であった2012/13年度(20.9%)を上回る見込み。

### □ 穀物(米、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



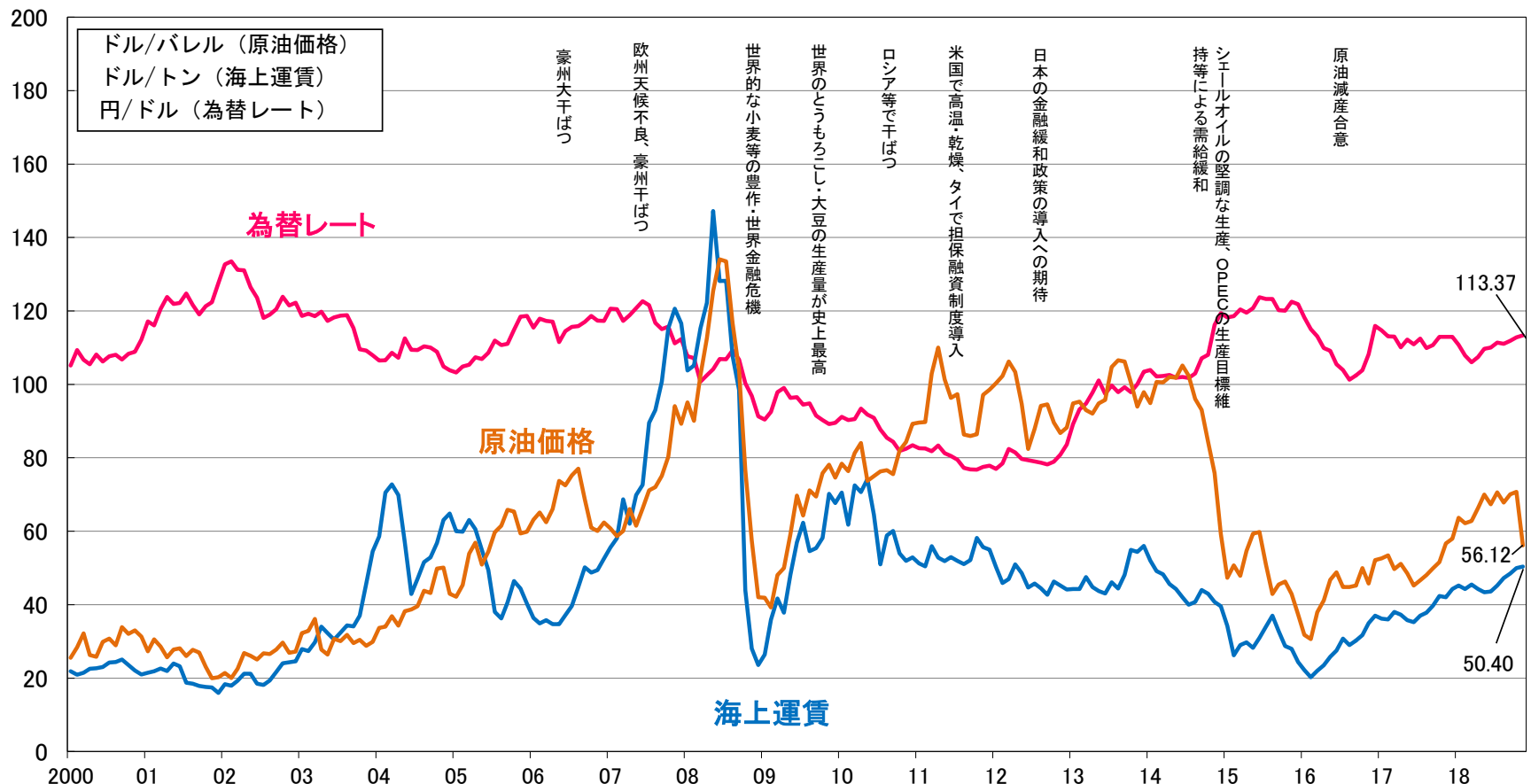
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(December 2018)、「IPS&D」

(注) なお、「IPS&D」については、最新の公表データを使用している。

## 資料3 原油価格・為替・海上運賃の動向

- 近年、為替レート、原油価格及び海上運賃の大幅な変動が、我が国の食品における原材料コスト・価格に影響。
- 円/ドル為替レートは、2012年の金融緩和等により円安となった後、2017年以降は110円/ドル程度で推移。原油価格は、2008年から2009年初めにかけて大幅に下落した後、上昇傾向であったが、2014年6月以降にシェールオイルの堅調な生産、OPECの生産目標維持等による需給緩和で下落、2016年以降、減産合意等から上昇。海上運賃は、2014年に新造船の供給増や原油価格の影響等により下落、2016年2月以降、原油価格の上昇や船腹需要の増加等により上昇。

【図】 原油価格、為替レート、海上運賃の動向



資料：(原油価格)内閣府「海外経済データ 月次アップデート」、米国エネルギー情報局(U.S. Energy Information Administration)「Weekly Petroleum Status Report」週別価格の平均値、(海上運賃)国際穀物理事会(International Grains Council) Ocean Freight Rates、「World Grain Statistics」、「IGC Grain Market Indicators」、「World Maritime Analysis Weekly Report」(米国ガルフー日本間パナマックス級の海上運賃)週別価格の平均値、(為替レート)日本銀行主要時系列統計データ表月次データの月中平均を基に農林水産省で作成。なお、掲載されている数値は2018年11月の平均値である。

# 資料4 平成30年6月以降の食品小売価格の動向

○ 加工食品の国内の食品小売価格については大きな値動きはなし。

平成30年6月～平成30年11月の  
食品小売価格の動向

【参考】平成30年7月～平成30年12月の  
食品小売価格の動向(速報値)

消費者物価指数(総務省)												食品価格動向調査(農林水産省)														
品目	H25	H26	H27	H28	H29	6月	7月	8月	9月	10月	11月	上昇率 (前年 同月比)	品目	H25	H26	H27	H28	H29	H30						上昇率 (前年 同月比)	上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均									平均	平均	平均	平均	平均	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
生鮮食品を 除く総合	94.5	97.7	100.0	99.7	100.2	101.0	100.9	101.2	101.3	101.6	101.6	0.9%	食パン	96.2	99.3	101.7	102.6	101.3	101.5	102.5	103.2	105.6	105.6	106.0	0.4%	—
食パン	96.3	98.5	100.0	101.1	100.9	100.8	101.0	101.5	102.4	102.7	102.5	1.9%	即席めん	106.6	109.1	117.0	116.7	116.5	115.8	115.6	115.8	120.0	120.0	119.2	-0.7%	—
即席めん	92.0	94.2	100.0	100.0	99.5	97.6	99.1	98.7	98.6	98.5	99.0	-0.7%	豆腐	99.3	101.9	101.6	98.4	97.2	96.3	96.0	96.5	99.2	98.7	97.9	-0.8%	—
豆腐	94.5	98.0	100.0	100.0	100.5	100.7	100.8	100.7	100.7	101.1	100.8	0.0%	食用油 (キャノーラ油)	91.2	91.2	88.7	85.2	84.0	82.4	82.5	83.5	90.2	93.2	89.7	-3.8%	—
食用油 (キャノーラ油)	102.6	102.8	100.0	97.8	94.5	93.4	93.4	92.4	92.9	93.2	93.2	-1.0%	みそ	117.2	119.7	121.0	120.8	122.9	128.1	128.6	128.6	136.2	136.8	135.9	-0.7%	—
みそ	99.7	100.6	100.0	99.4	99.1	100.2	100.5	99.6	100.0	99.7	99.3	-0.4%	チーズ	111.0	125.4	129.4	129.4	129.0	135.4	136.1	135.9	140.3	138.9	140.3	1.0%	—
チーズ	87.4	97.9	100.0	99.3	98.8	103.5	104.6	105.5	104.4	103.6	103.7	4.1%	バター	107.6	112.0	118.4	120.0	120.7	121.2	121.1	121.2	121.1	121.4	121.4	0.0%	—
バター	90.9	95.0	100.0	101.5	101.7	101.9	102.2	102.1	102.0	102.1	102.2	0.1%	マヨネーズ	103.7	112.2	110.6	109.8	108.9	106.4	106.4	106.5	115.5	115.1	114.7	-0.3%	—
マヨネーズ	95.0	103.5	100.0	98.1	96.7	94.6	95.3	94.7	94.8	95.5	95.8	-1.2%														

資料:総務省消費者物価指数

注1:平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

資料:農林水産省 食品価格動向調査(加工食品)

注1:平成20年1月の価格を100とした指数で表記している。ただし、バターについては平成20年5月の価格を100とした指数で表記している。

注2:調査は原則、各都道府県10店舗で毎週実施。

注3:調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4:マヨネーズのH24平均値は調査を開始した平成24年10月～12月平均。

注5:平成30年9月までの調査結果と10月以降の調査結果は、特売品の価格の調査方法が異なることから接続しないので、上昇率(前年同月比)は算出してない。